

# 同韻の二聯間における頂真格の修辞 『詩経』から謝靈運まで

著者	佐竹 保子
雑誌名	集刊東洋学
巻	114
ページ	109-122
発行年	2016-01-18
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00132759">http://hdl.handle.net/10097/00132759</a>

## 同韻の二聯間における頂真格の修辭

——『詩經』から謝靈運まで——

佐 竹 保 子

### 一 はじめに——問題の所在

「頂真格」とは、前の句の最後の語を次句の最初に配する修辭であり、日本では多く「蟬聯体」と呼ばれる。<sup>①</sup>前稿に記したように、頂真格の特性は、断絶の中の連続にある。頂真格は前の句と次句に跨がつて施され、句を異にする点で断絶があるが、しかし同じ語を直近にくり返すことで連続性が生ずるからである。

頂真格は「古詩に常有」とされ、謝靈運（三八五—四三三）詩にも少なくない。しかし謝詩の頂真格がいかなる様相を呈しているか、『詩經』以来の頂真格の修辭をいかに襲い、またそれらをいかに超脱して新たな地平を拓いているか、その点が検討に付されたことは、管見の限りではほとんど無かつたようである。小稿はその欠の一端を埋めようとするものである。

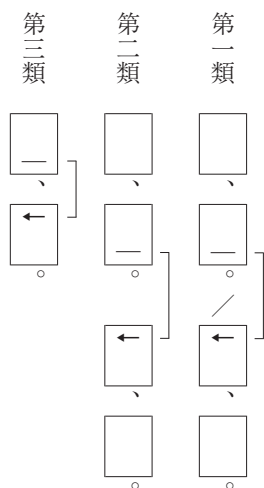
謝靈運詩の頂真格は、前句の末語を次句冒頭にくり返す、定義通りの正格が十九例、くり返される語の間に他の語が挿入される変格が五例、あわせて二十四例見出される。二十四例は、くり返される語、すなわち頂真格を担う語が初出する句（前の句）の性質によって、三類に分けられる。第一類は、該語初出の句が押韻句であり、しかも次聯が換韻する場合。

第二類は、該語初出の句は押韻句であるが、次聯が換韻せず、同韻の脚韻が続く場合。

第三類は、該語初出の句が非押韻句であり、該語が同一聯内でくり返される場合。

以上の三類をかりに図示すると、基本的には次のようになる。長方形が一句をあらわす。読点を付した長方形が非押韻句、句点を付した長方形が押韻句である。「┘」は、次聯が換韻していることを示す。長方形から伸びる矢印の

起点と終点はそれぞれ、頂真格を担う語の初出と再出を意味する。



謝靈運詩の頂真格二十四例のうち、第一類に属する九例については、『詩経』以来の同様の例と比較しつつ、前稿で検討した。その結果、謝詩の九例は、『詩経』から曹植詩を経て潘岳詩に至るまで頂真格第一類に試みられていた工夫を、ほぼ余すところなく吸収し活用していることが分かった。とりわけ潘岳詩は、頂真格の特性のうちその連続性を強調する余り、断続性を後退させる結果を招いていたが、後出の謝靈運詩は、潘岳詩に見られた連続性の過剰を抑制し、連続性と断続性の絶妙な均衡を取り戻していた。

以上の前稿での考察を踏まえて、小稿は、前掲した第二類の頂真格、すなわち頂真格を担う語が非換韻箇所の押韻句に初出する場合を、検討する。

## 二 謝靈運詩における頂真格第二類

謝靈運詩の頂真格第二類のうち、くり返される語の間に別字が挟まれない正格の頂真格は、次のとおりである。

1. 苕苕歷千載、遙遙播清塵。清塵竟誰嗣、明哲時經綸。  
〔述祖德〕二首之一 『文選』卷十九<sup>(5)</sup>
2. 委講綴道論、改服康世屯。屯難既云康、尊主隆斯民。  
〔同〕
3. 剖竹守滄海、枉帆過舊山。山行窮登頓、水涉盡洄沿。  
〔過始寧墅〕 『文選』卷二十六<sup>(6)</sup>
4. 昏旦變氣候、山水含清暉。清暉能娛人、遊子憺忘歸。  
〔石壁精舍還湖中作〕 『文選』卷二十二<sup>(7)</sup>
5. 樵隱俱在山、由來事不同。不同非一事、養痾亦園中。  
〔田南樹園激流植援〕 『文選』卷三十<sup>(8)</sup>
6. 不同非一事、養痾亦園中。中園屏氛雜、清曠招遠風。  
〔同〕
7. 楚人心昔絕、越客腸今斷。斷雖殊殊念、俱爲歸慮歎。  
〔道路憶山中〕 『文選』卷二十六<sup>(9)</sup>
8. 朽貌改鮮色、悴容變柔顏。變改苟催促、容色烏盤桓。  
〔長歌行〕 『樂府詩集』卷三十<sup>(10)</sup>

これらに対し、くり返される語が別字によって隔てられる変格の例は、以下のとおりである。

9. 否桑未易繫、秦茅難重拔。桑茅迭生運、語默寄前哲。

〔折楊柳行〕『樂府詩集』卷三十七<sup>6)</sup>

以上、謝靈運詩の頂真格全二十四例のうち、右のように非換韻箇所を押韻句と次句にあらわれるものは九例である。第一類の換韻箇所における頂真格九例と同数であり、両者で全体の八割弱を占める。

右の九例は、考察の便宜上、さらに三つの型に分かち得る。

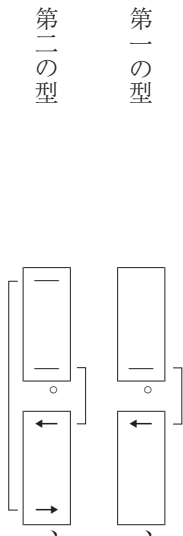
第一の型は、1、3、4、6のように、押韻句の末一語のみが、次句冒頭にくり返される、もつともオーソドックスな修辭である。1では押韻句の末一語「清塵」が次句冒頭にくり返されており、3でも同じく「山」が、4では「清暉」が、それぞれ次句の初一語となつてくり返されている。6では「中」字がそれに当たるが、押韻句末の「園中」が倒置され「中園」として次句冒頭にくり返されているともみなせる。

第二の型は、2と5のように、押韻句の末一語が次句冒頭にくり返されるとともに、押韻句内の別の一語も、次句にくり返されるものである。このときの二語は、押韻句が次句において、あるいはその両方において、他の字によつて隔てられている。2の「改服康世屯。屯難既云康」では「康」と「屯」とが、押韻句では「世」字に、次句では「難

既云」三字に隔てられる。5の「由來事不同。不同非一事」では「事」と「不同」とが、次句で「非一」二字に隔てられている。

第三は、押韻句中およびその前句中の各一語が、次聯上句に集約される型である。7と、変格の8および9がそれに当たる。7の「楚人心昔絶、越客腸今斷。斷絶雖殊念」では、押韻句末尾の「斷」とその前句末尾の「絶」が、次聯上句冒頭に「斷絶」とくり返されている。8の「朽貌改鮮色、悴容變柔顏。變改苟催促」では、押韻句中央の「變」とその前句中央の「改」が、次聯上句冒頭に「變改」とくり返される。9の「否桑未易繫、秦茅難重拔。桑茅迭生運」でも、押韻句二字目の「茅」とその前句二字目の「桑」が、次聯上句冒頭に「桑茅」とくり返されている。

以上三つの型を、把握の便をはかつて以下に図示した。図中の記号は、前章に記したものと同一である。



## 第三の型



これら三つの型は、謝靈運以前の詩句にも見出されるのか。謝靈運詩における修辭の様相をより精密に把握するために、以下に上記三型を順次検討する。

### 三 第一の型——押韻句末尾の一語が次句冒頭にくり返される例

第一の、押韻句末尾の一語が次句冒頭にくり返される型は、『詩經』では国風と頌とに一篇ずつ見出される。まず、魏風「碩鼠」の各章五句目以降に次のようにある。頂真格でくり返される語に傍線を付す。

逝將去女。	さあお前のもとを去り
適彼樂土。	あの樂しき地にゆこう
樂土樂土。	樂しき地よ 樂しき地よ
爰得我所。	そこに私の居場所を得よう
逝將去女、	さあお前のもとを去り
適彼樂國。	あの樂しき国にゆこう

樂國樂國。 樂しき国よ 樂しき国よ  
爰得我直。 そこに私の直<sup>ただ</sup>しさを得よう

逝將去女、 さあお前のもとを去り  
適彼樂郊。 あの樂しき田舎へゆこう  
樂郊樂郊。 樂しき田舎よ 樂しき田舎よ  
誰之永號。 誰もが行って声あげて歌うだろう  
また、周頌「良耜」の九句目以降は、次のようである。

其耨斯趙。 その鋤を刺して  
以薅荼蓼。 悪い草を切り払おう  
荼蓼朽止。 悪い草は朽ちてゆき  
黍稷茂止。 穀物が生い茂る

『詩經』以後、第一の型は多用される。たとえば「古詩十九首」の三首目（『文選』卷二十九）に次のようにある。  
驅馬策駑馬、 駄馬にむち打ち驅り立てて  
遊戲宛與洛、 宛（南陽）と洛（洛陽）とに遊びゆく  
洛中何鬱鬱、 洛は何ともにぎやかで  
冠帶自相索。 衣冠束帯が訪ねあう  
曹丕（一八七―二三六）の「雜詩」二首の一および二（『文選』卷二十九）も挙げておこう。

展轉不能寐、 寝返りをうつては眠れない  
披衣起彷徨。 衣をはおり起きてさまよう

彷徨忽已久、さまよううちにふと時が過ぎ  
白露沾我裳。白露が我がすそを濡らしていた

吹我東南行、（風が）私を東南に吹き飛ばす

南行至呉會、南のあたりは呉や会稽まで

呉會非我郷、呉や会稽は我が故郷ではない

安能久留滯。久しく留まるなどできようか

謝靈運詩以前に、こうした例はまことに枚挙にいとまがない。

詩のリズムは韻を踏むところでいったん小休止する。押韻を担う語はそのリズムに沿って、詩の流れをひとまず収束させる。しかしそこに頂真格が施されると、句末の語が、次句冒頭に再度登場する。詩をいったん収束させた語が、次の展開の先頭にあつてさらなる流れを生みだすのである。以下に示す謝靈運詩の1、3、4、6の例も、詩の流れを繋げる効果を図つたものである。

茗苕歷千載、遠い昔から千年をへて

遙遙播清塵。はるかに清い足跡を広めてきた

清塵竟誰嗣、清い足跡は畢竟誰が嗣ぐのか

明哲時經綸。道理を知る人（たる我が祖父）が当時

世を治めた（謝1.「述祖徳」）

剖竹守滄海、太守の証たる竹の割り符を与えられ滄

海に守りに出たが

枉帆過舊山。舳先を曲げてふるさとの山に立ち寄つ

た

山行窮登頓、山歩きでは登り降りを窮め

水涉盡洄沿。川渡りでは上り下りを尽くした

（謝3.「過始寧墅」）

昏旦變氣候、朝な夕なに氣候が変わり

山水含清暉。山と水とは清い光を含む

清暉能娛人、清い光は人を嬉しくさせ

遊子憺忘歸。旅人も心安らぎ帰ることを忘れる

（謝4.「石壁精舍還湖中作」）

不同非一事、同じでないのはこの一事（山の樵と隠

者）のみならず

養痾亦園中。病を養う者も（山の）園の中

中園屏氛雜、園の中は粗雑な気をしりぞけ

清曠招遠風。清い広やかさはるかな風をよぶ

（謝6.「田南樹園激流植援」）

#### 四 第二の型——押韻句中の二語がともに次句にくり返される例

では第二の型の、押韻句中の末一語を含む二語を、ともに次句にくり返す例はどうか。

第二の型は現存する作に見る限り、前章に挙げた第一の型とは異なつて、歴代それほど多くはない。管見の限り『詩経』に見出せず、『詩経』以後謝靈運詩までは、以下の十一例が存するに止まる。曹植（一九二～二三二）、阮籍（二一〇～二六三）、傅玄（二一七～二七八）、陸機（二六一～三〇三）、陶淵明（四世紀後半～四二七頃）の詩篇であり、各篇を二聯ずつ引用する。

1. 僕夫早嚴駕、御者が朝早く馬車を用意し  
吾將遠行遊。私は遠く旅立とうとする  
遠遊欲何之、遠く旅立ちどこへ行くのか  
吳國爲我仇。吳の国は私のかたき

（曹植「雜詩」六首之五『文選』卷二十九）

2. 征行安所如、旅立つてどこに行くのか  
背棄夸與名。虚名や評判を捨て去りに  
夸名不在己、虚名や評判は私に関わらぬ  
但願適中情。願うは心に適うことばかり

（阮籍「詠懷」驅車出門去『阮步兵詠懷詩註』）

3. 平晝整衣冠、夜明けがたに衣冠を整え  
思見客與賓。賓客に会おうと思つた  
賓客者誰子、賓客とは誰あろう  
倏忽若飛塵。たちまち消え去り飛ぶ塵のよう

（阮籍「詠懷」平晝整衣冠 同）

4. 百年何足言、百年など言挙げするにも足りぬのに  
但苦怨與讎。怨みと敵視に苦しむばかり  
讎怨者誰子、敵視し怨む者は誰あろう  
耳目還相差。耳と目すら羞じいる近さ

（阮籍「詠懷」咄嗟行至老 同）

5. 同心忽異離、同じ心だったが忽ち別々に  
曠如胡與越。遠く離れて（北の）胡と（南の）越のよう

- 胡越有會時、胡と越（の人）は会うときもあるが  
參辰遼且闊。參の星と辰の星ははるけくも隔たる

6. 邪正不並存、邪と正しさは並び立たない  
譬若胡與秦。たとえれば（北の）胡と（西の）秦のよう

（傅玄「朝時篇怨歌行」『玉臺新詠』卷二）

- 秦胡有合時、秦と胡（の人）は会うときもあるが  
邪正各異津。邪と正しさは船着き場が別

（傅玄「晉聲舞歌」五篇之五「明君篇」）

7. 形影曠不接、  
姿と影のようだった君と私ははるか離れて近づけず  
『宋書』卷二十二(樂志)

所託聲與音、  
託せるものは声と音だけ

音聲日夜闊、  
(だが) 音声も日夜に間遠となり

何用慰吾心。  
どうやって我が心を慰めたらいいのか

8. (陸機「贈尚書郎顧彦先」二首之一 『文選』卷二十四)  
此思亦何思、  
この思いのうえにさらに何を思うのか

思君微與音、  
あなたの美しさと言葉を思う

音微日夜離、  
言葉も美しさも日夜に遠ざかって

緬邈若飛沈。  
はるか隔たり飛ぶ鳥と沈む魚のよう

(陸機「擬行行重行行」『文選』卷三十)

9. 相見無雜言、  
(村人と) 会つてもおしゃべりはせず

但道桑麻長。  
ただ言う、桑や麻が伸びたねと

桑麻日已長、  
桑や麻は日々に伸び

我土日已廣。  
私の畑は日々に広がる

(陶淵明「歸園田居」五首之二 『箋注陶淵明集』卷二)

10. 道狹草木長、  
道が狭くて草木が伸びた

夕露沾我衣、  
夕べの露が我が衣を濡らす

衣沾不足惜、  
衣が濡れるのは惜しくもないが

但使願無違。  
ただ願いが違(たが)うことだけは無いように

(陶淵明「歸園田居」五首之三 同)

11. 行止千萬端、  
誰知非與是。  
人のふるまいは千万通り  
誰にわかるう是(正しい)か非(正しくない)かを

是非苟相形、  
(だが) 是と非が少しでも形になれば

雷同共毀譽。  
付和雷同して貶したり褒めたり

(陶淵明「飲酒」二十首之六 同卷三)

一見して明らかなのは、挙例の2から8までと11の八例が、同じ構造をとることである。たとえば2の阮籍「詠懷」に「背棄す夸と名とを。夸名は己れに在らず」とある。頂真格を担う「夸」と「名」は、前句では「與」を介し、次句では直接に結びついて一語をなす。かりに頂真格を担う字を●、その他の字を○として示すならば、2から8までと11とはすべて以下のようにあらわし得る。

○○●與●●○○○、

●で示した字は、阮籍詩の2では「夸」と「名」、3では「客」と「賓」、4では「怨」と「讎」、傅玄詩の5では「胡」と「越」、6では「胡」と「秦」、陸機詩の7では「聲」と「音」、8では「微」と「音」、陶淵明詩の11では「非」と「是」である。いずれも、ほぼ類義か反義の名詞である。そのためこれら二字は、前句においては「與」を介して並列の關係を結び、次句では直接に連結して熟語としてふるまうこ



とができる。

右の類型から外れるのが、1の曹植詩と、9と10の陶淵明詩である。

1の曹植詩「吾將遠行遊。遠遊欲何之」と10の陶淵明詩「夕露沾我衣。衣沾不足惜」は、上掲した類型の構造「○○●●●○○○○」に一見似る。だが、類型の「與」に当たる字が、曹詩では「行」、陶詩では「我」である。頂真格を担う二字は、曹詩では「遠」「遊」、陶詩では「沾」「衣」であり、前者は修飾語と被修飾語、後者は動詞述語と名詞目的語の関係にある。後者の「沾」「衣」は繰り返される「衣沾」においては、「沾」が他動詞から自動詞となり、「沾」と「衣」が倒置されて主語と述語の関係に変わる。前者も後者も、頂真格を担う二字が単純な類義や反義ではないため、句の構造も類型のような「○○●●●○○○○」を採り得ない。

9の陶淵明詩「但道桑麻長。桑麻日已長」に至っては、上掲の記号で示せば「○○○○●●●○○○○●●」となる。類型の「○○●●●○○○○●●○○○○」とは異なる。

では謝靈運詩はどうか。前々章に挙げた謝靈運詩句のうち、第二の型に属するものは以下のとおりである。

委講綴道論、（わが祖父謝玄は）道家の論の講義を

止め

改服康世屯。

軍服に着替えて世の災厄を治めようとした

屯難既云康、  
尊主隆斯民。

災厄と危難とを治めてしまおうと  
君主を尊びその民を榮えさせた

樵隱俱在山、

（謝2「述祖德」二首之一）  
きこりと隠者はどちらも山に居る

由來事不同。

（だが山に居る）いわれは同じでない  
不同非一事、

養痾亦園中。

病いを養う者も（山の）園の中

（謝5「田南樹園激流植援」）  
謝靈運の2「祖の徳を述ぶ」において、頂真格を含む詩句は、上掲の記号を用いれば「○○○○●●●○○○○●●」である。上掲した2の阮籍詩以下の類型「○○○○●●●○○○○」はもとより、類型からもっとも遠い9の陶詩の「○○○○●●●○○○○●●」とも異なっている。

これに対し謝詩の5「田南に園を樹つ」は「○○○○●●●○○○○●●」である。形の上では9の陶詩に同じい。だが9の陶詩「但道桑麻長。桑麻日已長」は、前句末三字の「桑麻長」が、次句では「日已」を挟みつつもそのままの順序でくり返されている。そのため、前句末の語を次句冒頭にくり返す正格の頂真格ではない。他方、上掲の謝詩はどちらも、前句末の「屯」や「不同」を次句冒頭にくり返す正

格である。

要するに、第二の型に属する謝靈運の二例は、現存作に見る限り、阮籍詩以来類型となつてゐる「○○●●與●●○○○」を踏襲しないのみならず、類型から遠い詩句とも一致しない。ただ、謝詩二例のうちの一例は、類型から遠い陶淵明の詩句に、一致はしていないけれども、他の例に較べればよく似てゐる。おそらくは近い先輩の陶淵明の修辭に学びつつ、さらに独創的に練り上げていった可能性<sup>10</sup>を想定することも不可能ではないであらう。

### 五 第三の型——一聯各句の語が次聯冒頭に集約される例

謝靈運詩における同韻二聯間の頂真格において、最後の第三の型はどうか。すなわち、一聯各句の語が次聯の冒頭に集約される例である。

第三の型は、前章に検討した第二の型以上に、現存する先行例が少ない。管見の限りでは『詩經』に見当たらず、『詩經』から謝靈運にいたる間には、陶淵明に一例あるのみである。「飲酒」二十首其の十三であり、一一三聯目に、次のようにある。

一士長獨醉、一人の男性はずっと独り酔ったまま

一夫終年醒。一人のおとは終生醒めてゐる  
醒醉還相笑、醒めた者と酔った者は相手を笑い  
發言各不領。言葉を發しても分かり合えない  
先行例の寥々たるに比して、謝靈運詩には、以下の三例が確認される。

楚人心昔絶、楚の人（屈原）は心が昔絶たれた  
越客腸今斷。越の旅人（私）は腸が今断たれてゐる  
斷絶雖殊念、断腸と絶望とは別々の思いだが  
俱爲歸慮款。どちらも帰心にさいなまれてゐる

（謝7.「道路憶山中」）

朽貌改鮮色、朽ちゆく姿は鮮やかだった様相を改め  
悴容變柔顏。穢れるみめは柔らかだった顔を変える  
變改苟催促、変と改とが少しでも急かされれば  
容色烏盤桓。容色がどうして留まれよう

（謝8.「長歌行」）

否桑未易繫、「否」の卦の「桑」でも繫がるのは容易ならぬ  
「泰」の卦の「茅」でも重なり抜き難

泰茅難重拔。

い

桑茅迭生運、桑と茅がかわるがわるに運りゆく  
語默寄前哲。（その中での）出処進退は先哲に従お

う

## (謝9.「折楊柳行」)

陶淵明「飲酒」其の十三では、押韻句末字の「醒」が、次聯の冒頭にくり返されていた。正格の頂真格である。さらに押韻句の前句末の「醉」が、次聯冒頭では「醒」と結びついて「醒醉」という熟語となっていた。前章の記号を用いれば「○○○○●、○○○○●。●○○○○」の構造であり、これは謝詩の7「道路にて山中を憶う」に同じい。謝詩の7においても、押韻句末字の「斷」が、次聯冒頭にくり返される。加えて押韻句の前句末の「絶」が、次聯冒頭の「斷」に結びついて「斷絶」と記され、「○○○○●、○○○○●。●○○○○」の形をとる。

謝詩の8「長歌行」と9「折楊柳行」の例は、その変格と見なしうる。頂真格を担い、次聯冒頭に結びついてくり返されるのが、8では「變」と「改」、9では「桑」と「茅」である。それらが前聯では、各句の末ではなく、各句三三目、あるいは各句二字目に位置している。記号であらわせば、8は「○○○○●、○○○○●。●○○○○」、9は「○○○○●、○○○○●。●○○○○」である。

挙例のうち、陶淵明の詩句と謝詩の7「道路にて山中を憶う」の詩句が、構造上よく似る。しかし意味まで踏みこむならば、同様とは言いがたい。

陶詩において頂真格を担う「醉」と「醒」とはそもそも

反義である。詩句にあっても「醉」者と「醒」者は互いに相容れない存在として、上掲の後聯に示される。「醒醉還た相い笑い、言を發するも各おの領らず」。「醒」者と「醉」者は嘲笑しあい、互いに相手の言葉を理解できない。

これに対し謝靈運「道路にて山中を憶う」は、頂真格を担う「絶」と「斷」が同義である。該詩で「心」が「昔絶え」た「楚人」は屈原のこと、「腸」が「今断た」れている「越客」は謝靈運その人を指すと、古来解釈される。「楚」に対する「越」、「昔」に対する「今」と、空間と時間を異にしているけれども、両者はともに悲痛の極みにある。続く「斷・絶は念いを殊にすと雖も、俱に帰慮の為に款かる」は、その悲痛の所以が「俱に帰慮」にあると、両者の同質性を示す。

謝詩の8「長歌行」と9「折楊柳行」の頂真格も、異質性ではなく同質性を呈す。

8の「朽つる貌は鮮色を改め、悴うる容は柔顔を變う。変改いんし苟くも催促せられば、容色烏んぞ盤桓ばんくわんせん」で、頂真格をになう「改」と「変」はそれぞれほぼ同意であり、その上で「容色」の「変改」がいささかも「盤桓」ることなく「催促うなが」されると詠じられる。「変」字と「改」字を入れ替えても、詩意に差異は生じない。

9はやや複雑である。該詩において頂真格を担う「桑」

と「茅」に冠せられている「否」と「泰」とは、どちらも『易』の卦である。

「否」は坤下乾上（三三）で、卦辭に次のようにある。

否は之れ人に匪ず。君子の貞に利あらず。大往き小來る。（否之匪人。不利君子貞。大往小來）

孔穎達の「正義」を参考にすれば、「否」の時には人道が行われず、君子が貞しいことをしても不利にはたらし、大なる陽の氣が去り卑小な陰の氣がやってくる、という。

「否の桑」は、「否」の「九五」（五番目の陽の爻）の爻辭にあらわれる。

九五、否を休す。大人は吉なり。其れ亡びなん其れ亡びなんとて、苞のある桑に繋がる。（九五、休否。大人吉。其亡其亡、繫于苞桑）

右の「休否」を、王弼の注は「否道を休することができ者である。否を小人に施すのが、否の休である。大人だけにそれができる（能休否道者也。施否於小人、否之休也。唯大人而後能然）」とする。右の「其亡」以下の八字については、王弼は「だから将来の危うさを氣にかけるからこそ、堅固でありうるのである（故心存將危、乃得固也）」とする。これだけでは分かりにくいので、孔穎達の「正義」を見ると次のようにいう。「休は、美である。閉塞状態の時でもよいことを行いうる、というのである（休、美也。

謂能行休美之事於否塞之時）、「大人だけがなくなしえて吉を得るのである（唯大人乃能如此而得吉也）」「其亡」以下については「身が安らかでも、心はいつも将来の危難を氣にかけている。亡びるだろうか亡びるだろうかとひたすら心配するからこそ、なんとか堅固であり得るのが、つまり苞桑に繋がれるということである（身雖安靜、心意常存將有危難。但念其亡其亡、乃得固者、即繫于苞桑也）」「苞」とは、本である（苞、本也）、「桑」というものは、その根が多い。（根が多ければしっかり堅固ということになる（桑之爲物、其根衆也。衆則牢固之義）」とある。

つまり、『易』の「否」自体は「不利」をあらわす卦である。だがその中で「桑」字の見える「九五」の爻辭だけは、例外的に「大人」の「吉」を予言するのである。

他方「折楊柳行」で、「否」の対語となる「泰」はどうか。「泰」は、「否」とちょうど逆の乾下坤上（三三）の卦である。その卦辭も「否」とは対蹠的である。

泰は、小往き大來る。吉にして亨る。（泰、小往大來。吉亨）

「折楊柳行」に「泰の茅」とある「茅」は、「泰」卦の「初九」（最初の陽の爻）に見える。

初九、茅を抜くに茹たり。其の彙を以にす。征くは吉なり。（初九、拔茅茹。以其彙。征吉）

王弼はいう。「茅というものは、その根を抜くと、あたりの茅と一緒に引き連れ（て抜け）る。茹とは、一緒に引き連れるさまである（茅之爲物、拔其根而相牽引者也。茹、相牽引之貌也）」、「上が順えば応じて、遠く距たる（た）ことがない。進んで皆が志を得る。だから仲間と一緒に前進して吉である（上順而應、不爲遠距。進皆得志。故以其類征吉）。孔穎達の「正義」は、「以其彙」についてさらに周到に「彙とは、類である。類を以て従う（彙、類也。以類相従）」と説明する。

先の「否」とは逆に元来良い卦である「泰」の、その中でも文字通り「吉」を予言する「初九」の爻辞に、「茅」字は織り込まれている。

この解釈を「折楊柳行」に戻そう。該詩の「否の桑」とは、本来悪しき卦である「否」の中で、苞に「繋がる」がゆえに「吉」である状態を指す。対をなす「泰の茅」は、本来良き卦である「泰」にあつて、抜けば「重なり」連なることで「吉」となる。「否の桑」「泰の茅」は、どちらも吉兆なのである。

ところが「折楊柳行」は「否の桑も未だ繋がり易からず、泰の茅も重なり抜き難し」と詠う。たとえ「否の桑」であっても「繋がり易からず」「泰の茅」であっても「重なり抜き難い。不運のさなかのわずかな吉兆も、幸運のさなか

の順な吉兆も、どちらも現実には障害が多く、その通りにはなり難い、というのである。二句はいずれも予言どおりにならない不吉を意味する。その点で「折楊柳行」の頂真格を織り込む二句は同質性を呈している。

要するに、謝靈運「道路にて山中を憶う」「長歌行」「折楊柳行」では、いずれも頂真格を担う語が類義であり、それを織り込む詩句も両者の同質性を明示しているのである。

本章冒頭に記したように、右のような、前聯各句の各一語が次聯冒頭に集約される第三型の頂真格は、謝靈運以前の現存詩にはきわめて稀少であり、陶淵明の一例が見出されるにすぎない。その陶詩の一例においては、頂真格をになう二語が、相互にあい容れない異質さとして詩中に詠じられていた。これに対し、後出の謝靈運詩の三例は、陶詩と構造を同じくしながら、頂真格をになう二語の同質性を強調する。謝靈運が意識的に施した工夫であるのかはもとより不明だが、少なくとも、先行する陶淵明の詠じかたと同じではないことには留意しておきたい。

## 七 むすびにかえて

小論は、謝靈運詩における同韻の二聯間に配された頂真

格の修辭が、いかなる前例を有し、それらをいかに踏襲し、またいかに踏襲を越えているかを検討した。検討に当たり、考察の便を図って、同韻二聯間の頂真格を三つの型に分けた。

第一は、前聯押韻句末の一語が次聯冒頭にくり返される型である。もともと単純素朴な型で『詩経』に二例現れるほか、魏晋期の前例も多く、謝詩にも四例あるが、謝詩における特別な工夫は認められなかった。

第二の、前聯押韻句中の二語がともに次聯上句にくり返される型と、第三の、前聯二句の一語ずつがともに次聯上句にくり返される型は、『詩経』に見えない。『詩経』以後では、第二の型は曹植詩から謝詩まで十三例を数えるが、謝詩の二例は、語の構成が、先行する十一例すべてと異質であった。第三の型は、陶淵明に一例、謝詩に三例見えるが、陶詩が二語の対蹠性を強調するのに対し、謝詩は同質性を呈示し、詠じ方が相違していた。

総じて、小論に検討した頂真格においても、前稿に検討したものと同様、謝靈運詩句には、先行例以上に、新味や洗練を追求する志向をうかがうことができた。

## 注

(1) 『漢語大詞典』の「頂真」の項に「一種修辭方法。用前

面結尾的詞語或句子作下一句的起頭。」（漢語大詞典出版社一九九三年。第十二卷二二一頁。なお簡体字は日本漢字の新字体に置き換えた）、『新字源』の「蟬聯」に「②漢詩で、前の句の末の語を受けて下の句を始めるもの。」（角川書店一九九八年改訂版二九版。八九三頁）とある。

(2) 拙稿『詩経』から謝靈運詩までの頂真格の修辭——押韻句を跨ぐもの』（『東北大学中国語学文学論集』第十九号二〇一四年）。

(3) 清・梁章鉅（一七七五—一八四九）『文選旁証』（東北大学附属図書館蔵 光緒八年（一八八二）刊本）に「下句重上字、古詩常有」。

(4) 前稿では「二十五例」と記したが、それは正格の頂真格に「北亭與吏民別」を含めていたことに由る。該詩には「行久懷邱窟、景辰感秋旻。旻秋有歸棹、景景無淹津」とあり、頂真格第二類に属す。だが、該詩は『乾隆溫州府志』卷二十三に初めて現れる。歴代謝詩と認定されてきた詩篇とはいいたいので、今回は検討から外す。また、謝靈運「登江中孤嶼」の第三聯は李善注『文選』本系では「亂流趨正絕、孤嶼媚中川」に作るが、五臣注『文選』本系では「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」に作る。五臣注系本では頂真格の第三類になるが、表記に揺れがあるため、これも二十四例から省いてある。

(5) 以下、『文選』は尤袤本李善注『文選』（石門圖書有限公司影印 一九七六年）に拠り、『唐鈔文選集註彙存』（上海古籍出版社影印 二〇〇〇年）、足利学校藏明州刊本（人



民文学出版社影印 二〇〇八年）を参照し、謝靈運詩については、黄節『謝康樂詩注』（人民文学出版社 一九五八年）、顧紹柏『謝靈運集校注』（中古古籍出版社 一九八七年）等を参照した。『樂府詩集』は、文学古籍刊行社影宋刊本（一九五五年）を用いて中華書局標点本（一九七九年）を参照した。正史は百衲本二十四史（台湾商務印書館 一九三七年初版 一九八一年台五版）に拠り、『易』『詩経』は四部叢刊本と『重刊宋本十三經注疏 附校勘記』（芸文印書館 一九七六年六版）、阮籍詩は黄節註・華忱之校訂『阮步兵詠懷詩註』（人民文学出版社 一九八四年）、陶淵明詩は袁行霈『陶淵明集箋注』（中華書局 二〇〇三年）、『玉臺新詠』は吳兆宜注・程琰刪補・穆克宏点校『玉台新詠箋注』（中華書局 一九八五年）に拠り、明小宛堂覆宋本『玉臺新詠』影印版（人民文学出版社 二〇一〇年）を参照した。また、魏晋南北朝詩の押韻については、于安瀾『漢魏六朝韻譜』（河南人民出版社 一九八九年）、周祖謨『魏晉南北朝韻部之演變』（東大圖書股份有限公司 一九九六年）に従った。

(6) 『樂府詩集』は「桑茅」を「桑苧」に作るが、諸本の校定に従う。

(7) 『詩経』の押韻については、程俊英・蔣見元『詩経注析』（中華書局 一九九一年）に従う。

(8) この詩の初聯と次聯は、「驅車出門去、意欲遠征行。征行安所如、背棄夸與名」で、「征行」をくり返す二句目と三句目は、小稿第三章に述べた第一型の頂真格を用いている。

る。

(9) 作者名は『樂府詩集』卷五十三に拠る。

(10) 謝靈運詩が陶淵明詩に学んだ可能性については、石川忠久「謝靈運に見る陶淵明の影」（『古田敬一教授頌寿記念中国学論集』汲古書院 一九九七年）、佐藤正光「謝靈運と陶淵明の光彩・陰影表現について」（同）に論じられている。

(11) 『文選』李善注に「楚人、屈原也。越客、自謂也。沈約宋書曰、靈運本在陳郡、父祖並葬始寧縣、并有故宅、遂籍會稽。故稱越客焉」とあり、管見の限りこれへの反論を見ない。

(12) 正義に「否之匪人者、言否閉之世、非是人道交通之時、故云匪人。不利君子貞者、由小人道長君子道消、故不利君子爲正也。陽氣往而陰氣來、故云大往小來。陽主生息、故稱大。陰主消耗、故稱小」。